

## グアムキャンプ報告書

報告者 山口輝義

開催趣旨：①柔道を通して日本とグアム及び近隣諸国との友好親善を推進する  
②グアム及び近隣諸国における柔道普及と指導者・選手育成を支援する  
③「五の形」を通じ、柔道と自然の関わり、その理念を探求する  
④柔道を通じた「平和教育」を実践する

開催期間：2012年8月29日（水）～9月2日（日）

開催場所：グアム島

参加者：マリアナ柔道協会約40名及び、パラオ柔道協会1名

派遣指導員：橋本敏明（本法人副理事長・学校法人東海大学常務理事・教授）

山口輝義（学校法人東海大学職員・松前柔道塾教師）

佐藤勇作（東海大学体育学部武道学科4年）

野口竜光（東海大学体育学部武道学科4年）

実施内容：

8月29日（水）

午前 5:00 佐藤・野口グアム空港着 ホテルに移動、チェックイン

午後 4:30 橋本・山口グアム空港着 ホテルに移動、チェックイン完了後練習会場に移動

5:00 練習①

準備体操・受身・打込

NPO 法人及び指導陣の紹介（飛行機遅延のため、体操・打込終了後に挨拶）

グアムキャンプの趣旨・練習計画説明

技術指導 ＊子供と大人でグループ分けをして各20分

a. 背負投（野口）

b. 大外刈（佐藤）

乱取稽古＊3分×7本

8:00 練習終了

日程確認打ち合わせ及び夕食

予定より一時間遅れでグアムに降り立った橋本先生と私は、グアムオリンピック委員会委員長であり、マリアナ柔道協会代表のリック・ブラス先生の出迎えを受け、ホテルに荷物を置くとそのまま道場に向かった。

練習場はグアムオリンピック委員会の事務所のすぐ後ろの建物の1階。この日はテコンドーの練習日で、道場を二つに分けての練習である。事前にグアム側と練習計画を作成し学生指導員にも指示を出していたため、私たちが到着する前に準備体操から打ち込みまでは計画に沿ってメニューをこなしていただいた。橋本先生と私の紹介をいただいた後、NPO 法人の活動内容や今回の開催趣旨、日程等を説明し、さっそく練習に戻る。この日は立技の基本（組手、崩し、体捌きなど）を実際の投技の中で説明することを目的にしていた。また2名の学生に指導体験をしてもらうことも大きな目標であるので、それぞれの得意技である大外刈（佐藤君）、背負投（野口君）の指導を両名に担当してもらった。この日の練習は約40名が参加

していたので、これを年齢（中学生）で二つに分け、それぞれ20分の指導時間を設けた。受けはグアムの選手にお願いし、通訳は私とグアムのゲン・イマイ先生がおこなった。

このように海外で自分の技を指導するのは初めてであるが、二人とも事前の準備をしっかりとっていたようで、限られた時間の中でわかりやすくポイントを指導していた。特に子供たちは変な癖がないこともあり、二人の技術を素直に吸収していた。技術指導の後、3分の乱取稽古を7本行った。昨年12月に本法人と望星学塾が共催した塾友杯大会に参加したオースティン君（小学6年）の上達ぶりが目に付いた。引率で一緒に来日したゲン先生によると、日本から戻った後、練習に取り組む姿勢が明らかに変わったとのこと。

練習中リック先生にパラオ共和国から参加のアグオン先生（Ismael Agumon）を紹介された。直前にオリンピックが開催されたこともあり、マリアナ諸島の関係者には案内が十分に行き届かなかった中での参加に深く感謝した。

練習終了後、グアム側関係者と会食をしながら日程の打ち合わせを行い、練習、講話及び平和公苑慰霊については事前の計画通りであることを確認した。またグアム副知事及びグアム大学総長との会談が追加され、日時と場所について説明があった。

8月30日（木）

午前 5:30 早朝トレーニング 於：イパオビーチ公園 約45分間

15分走・ダッシュなど

11:00 グアム副知事表敬

NPO法人及び東海大学の活動説明、今後の交流について前向きな意見交換を行う

午後 12:00 午後の日程に関する打ち合わせ及び昼食

1:30 平和慰霊公苑訪問（塚本中佐慰霊碑など確認）

5:00 練習②

準備体操 野口・佐藤が大学柔道部のウォームアップを取り入れながら行う

寝技

- A. 補強練習（脇しめ、エビ、逆エビなど）
- B. 体捌き（足抜き）
- C. 四つん這いの相手を前方から脇を掬って抑える練習
- D. 投技（自分の技）から抑え込みへの動作練習

立技

- A. 打込：前日説明した背負投と大外刈の復習
- B. 技術指導\*子供と大人でグループ分けをして各20分  
一本背負（野口）及び大内刈（佐藤）
- C. 乱取稽古 3分×7本

8:00 練習終了

日程確認打ち合わせ及び夕食

朝 5:15 にリック先生の次男、エリック・ブラス君がホテルに迎えに来て、トレーニングを行うイパオビーチ公園に向かった。5:30の整列には約10名が姿を見せ、準備体操。真っ暗で公園の中を走ることが不可能だったため、ホテルロードの歩道を15分走る。高校生の男子1名が学生（佐藤君）と殆ど同じスピードで走り切り、公園に戻ってきた。帰ってきた者たちから坂道を使ったダッシュを行い、全員が戻ったところで、馬跳びなどの補強運動を行った。走っているうちに参加者が増え、最後の整列をする時点では20名になっていた。パラオのアグオン先生も長距離走からほぼすべてのメニューと一緒にこなされていた。

ホテルのレストランで朝食を済ませた後、リック先生の車でグアム政府に移動し、レイ・テノリオ（Mr. Raymond S. Tenorio）副知事を表敬した。本法人及び東海大学を紹介し、グアムと東海大学の関係などに

ついてリック先生と橋本先生が説明した。テノリオ副知事は日本に対する見識も深く（奥様は日本人）、今回のキャンプに心から謝辞を述べられると同時に、このような交流が活発化することを希望し、グアム政府としても協力を惜しまないと述べられた。

副知事との会談内容を確認しながら昼食を摂る。副知事から今後の活動に前向きな話が出たことで、リック先生から具体的な希望として、グアムの若い指導者を養成するプログラムの構築について話が出た。橋本先生からは本法人がロシアと行っている指導者育成プログラムを例に挙げながら、今後双方で協力して指導者を育成していきたいとの回答がなされた。

昼食後、グアムオリンピック委員会の事務所を訪問。3階建のビルを所有していて、1階と2階が事務室、3階はオーディオ設備の完備した会議室になっており、橋本先生の講話はこの会議室で行うこととした。

午後、学生2名はリック先生の長男リック・ブラス・ジュニア君の車で島内研修。橋本先生と私はゲン先生の運転で、島の北部（ジーゴ）にある平和慰霊公苑に向かった。平和慰霊公苑は太平洋戦争におけるグアム戦（1944年7月～8月）で日本の司令部が最後の突撃命令を出した塹壕の隣にあり、この島で命を落とした方々の霊を慰めている。松前重義先生は、東條英機内閣の戦争遂行政策に反対した同志で、このグアムで落命した塚本清彦（陸軍中佐）氏を悼み、終戦から30年経った1978年この地に慰霊碑を建立している。橋本先生と私は慰霊碑の状態を確認し、グアム戦で犠牲になった日米及び現地の人たちの霊に手を合わせた。

5:00からの練習には前日を上回る人数の参加があった。前半は寝技の補強運動や相手が四つん這いの状態での基本を指導し、それぞれ反復練習を行った。後半の立技は前日の復習を行い、続きとして、大内刈（佐藤君）と一本背負投（野口君）の説明を同じく2グループに分けて行った。参加者が増えたが、テコンドーの練習が無く、道場全体を使えたため十分練習できた。大きな送風機を回しているものの、道場は高温多湿な環境にあるため、水分補給の休憩を頻繁に入れるようにした。全体的に、中高生クラス的女子選手の運動能力が高いことがわかった。また子供たちが技術を吸収するスピードも速く、この二日間で学んだ背負投や大外刈を乱取稽古の中で積極的に試していた。

夕食時に、グアム大学総長表敬など、翌日の日程確認を行った。

8月31日（金）

午前 5:30 早朝トレーニング 於：イパオビーチ公園 約45分間

15分走・ダッシュなど

8:30 島内研修

知事公邸→太平洋戦争博物館→太平洋戦争公園（グアム戦激戦地跡の高台）→  
アッサンビーチ（米軍上陸地）→アプラ港→アガット（見晴らし台）→  
ウマタック村→ソレダット砦→

午後 1:00 午後の日程に関する打ち合わせ及び昼食

3:00 グアム大学総長表敬

NPO法人及び東海大学の活動説明、今後の交流について前向きな意見交換を行う

5:00 練習③

準備体操 野口・佐藤が大学柔道部のウォームアップを取り入れながら行う  
寝技

- A. 補強練習（脇しめ、エビ、逆エビなど）
- B. 体捌き（足抜き）
- C. 四つん這いの相手を後方から脇を掬って抑える練習
- D. 投技（相手の技）から抑え込みへの動作練習

立技

- A. 打込：前日まで説明した背負投・一本背負投・大外刈・大内刈の復習
- B. 技術指導 連続技  
大内刈 → 背負投又は一本背負（野口）

大内刈 → 大外刈 (佐藤)

C. 乱取稽古 3分×7本

D. 寝技乱取稽古 3分3本

8:00 練習終了

日程確認打ち合わせ及び夕食

前日と同じく、5:15にエリック・ブラス君がホテルに迎えに来て、トレーニングを行う公園に向かった。今回の早朝トレーニングは、グアム側の要望で、開始時刻を5:30に設定した(登校・出勤前に参加できるように)。昨日ゲン先生から注意があったので、今朝は整列の段階からほとんどの参加者が姿を見せていた。昨日の経験を踏まえて学生達からトレーニングメニューの提案があったので、全て学生に任せることにした。最初の長距離走は、走力の差で公園に戻る時間が違ってしまうため公園内の駐車場(照明で明るさが保たれている)を周回する形をとり、その後のダッシュや腕立て伏せなど全てのメニューを全員で行えるように学生が工夫していた。短い時間ではあるが、参加者の顔から充実した様子がうかがえた。

ホテルでの昼食後、リック・ジュニア君の運転で島内研修に出かけた。約70年前、太平洋戦争の際、米海兵隊が上陸したアッサンビーチと、熾烈な戦闘が行われた丘に立つ。記念碑に「乱れ飛ぶ砲撃によって海水が沸騰した」とあるのを読み、背筋が凍りついた。

島南端のウマタック村及びソレダット砦(スペインが構築)ではリック・ジュニア君がこの島のスーパースターであることを再認識した。すれ違う村民が手を振り、握手を求め、抱き合って歓迎する。話によるとこの歓待はオリンピックでの活躍によるものではなく、彼が時々この村を訪れて受身など柔道の指導を行っている為とのこと。

ホテルに戻る帰路、ジュニア君の五輪での活躍を祝うとともに島を案内してくれたお礼の昼食会を持った。彼は2016年の五輪まで競技活動を行った後、大学で政治学の学位を取り、将来はグアムのために働きたいと夢を語ってくれた。

いったんホテルに戻り、リック先生の車でグアム大学に向かう。私が20年前に英語を学んだ小さな建物はそのままだったが、キャンパスの中には真新しい校舎がいくつも並んでいた。アンドロウッド総長(Dr. Robert Underwood)を表敬し、昨日の副知事と同様に私たちの活動や今回のプログラム、グアムと東海大学の関係について説明した。アンドロウッド総長は、グアム大学でも柔道の授業を再開したい(以前開講したこともある)と述べるとともに、グアム大学の海洋研究所が国際的にトップレベルの評価を受けていることを紹介し、総合大学として今後の交流に前向きな姿勢を示した。

5:00からの練習は、前日の続きとして、前半では寝技の基本を反復練習した。後半の立技ではこの2日間で習得した技を利用した連続技の説明(技の繋ぎによって相手を崩す)を行い、打込や投込を通じてその原理を学んだ。立技の乱取稽古で終了するつもりであったが、ゲン先生から寝技の乱取稽古を行いたいと強い要望があったので、急遽、寝技の乱取を3本追加した。

夕食を兼ねた打ち合わせでは、翌日のタイムテーブルの確認を行い、午前の練習にテレビ局が、午後の練習に新聞社がそれぞれ取材に来ることが報告された。

9月1日(土)

午前9:00 練習④

準備体操

寝技

A. 補強練習(ブリッジ)

B. 補強練習(足回し)

C. 引込みの攻防(基本と攻め方)

下からの攻め方(佐藤)・上からの攻め方(野口)

D. 寝技乱取

立技

連続技の反復練習を兼ねた移動打ち込み

\*練習中に地元テレビ局「KUAM」の取材を受ける\*夜のニュースで放映

11:00 終了

12:30 平和慰霊公苑訪問 キャンプ参加者及び保護者約 20 名が参加

- A. 第二次世界大戦前後の歴史と松前重義先生の活動など説明
- B. 塚本中佐を含むグアム戦の戦没者を慰霊
- C. 日本軍司令部跡見学

1:30 慰霊公苑訪問参加者全員との昼食会

2:30 講和 於：グアムオリンピック委員会会議室

3:30 練習⑤

準備体操

五つ形

- A. 演武（取：橋本・受：佐藤）
- B. 説明及び練習

立技

- A. 打込
- B. 乱取稽古 3分6本

\*練習中に地元紙「Pacific Daily News」の取材を受ける\*9/2の朝刊及びWebに掲載

4:30 終了

7:00 夕食会

柔道協会メンバーのアリオラ家主催の夕食会に招待を受ける（関係者約 30 名出席）

午前 9:00 から 2 時間練習を行う。前半の寝技は、引込からの攻防をテーマに基本的な動作を指導し、それらを習得するための反復練習を行った。また、それぞれ上から攻めた場合と下から攻めた場合の技術を佐藤君・野口君が指導した。立技は昨日行った連続技の練習を中心に行った。練習中テレビ局の取材を受け、グアムと東海大学の関係は既に 30 年前（松前重義先生の時代）から続いていること、これから交流を活性化させ、相互理解と人材育成に協力したいと話した（尚、この日は議会選挙投票日のため、地元メディアは投票所に張り付いていなければいけないところを、柔道の取材に時間を割いてくれた）。

練習終了後、ジーゴの平和慰霊公苑に向かう。呼びかけに応じて、趣旨に賛同した 20 名以上の方が自分たちの車で公苑に参集した。慰霊塔を守る平和寺の中で、橋本先生から「日本にも命がけで戦争に反対した人たちがいたこと」「松前先生と塚本中佐の関係」「松前先生の掲げた国際平和構築の目標と、その志を引き継いだ東海大学と NPO 法人の活動」などについて説明がなされた。その後、塚本中佐を含む戦没者の慰霊を行い、希望者は米軍に追い詰められた日本軍の司令部跡地（ジャングルの塹壕）に足を運び、その場でも慰霊を行った。

平和慰霊公苑訪問に時間を要し昼食の時間がなくなってしまったため、リック先生の配慮で、参加者全員で昼食会を行った。

食事後オリンピック委員会会議室で橋本先生の講話を行った。講話は本法人・山下理事長からのメッセージ「柔道の原理を学び、その心を社会に活かそう！！」の英訳版を参加者に配布し、その内容に添って進められた。

講話終了後道場へ移動し、「五つ形」の演武（取：橋本先生・受：佐藤君）を行い、それぞれの動作を解説し、形に込められた嘉納師範からのメッセージを読み取った。また、5本の中から、最初の3本を全員で練習した。「五の形」を学んだあと、立技乱取稽古を6本のみ行った。

練習中、新聞社の取材を受け、午前中と同様に私たちの交流の歴史やこれからの抱負などを述べた。記者は「五の形」の演武と説明に大変興味を示した。特に「五の形」が海（波）の動きを取り入れ投げ技の要点を表現していること、柔道はこのように競技者だけでなく全ての人が道場以外の様々な場所で学ぶことができるということに感銘を受けた様子だった（実際そのような記事が翌日の新聞に掲載された）。

夕食は、元柔道協会のメンバーで今は息子が柔道をやっているアリオラ家に招待を受けた。グアムと東

海大学の関係は、松前重義先生が国際柔道連盟で活動を行っている時代に、故アルセイカ氏が横須賀の渡辺道場で稽古仲間だった故猪熊功先生を通じて松前重義先生を紹介されたことに始まる。その後、主に光本健次先生（現東海大学教授）とリック先生の間で交流が活発化し現在に至っている。アリオラ家のビンセントとフランクの兄弟は、1985年の夏に光本先生が監督をしていた付属高輪台高校で研修を行った。当時高校2年生だった私は、その時からの友人であり、約20年ぶりの再開となった。フランクは高輪台高校で過ごした1か月がその後の人生でどれだけ役立っているか、当時の思い出とともに、夕食会に集まった人たちに力説してくれた。高校柔道部から兄弟にプレゼントした集合写真や柔道衣を今でも大切に持っていることを知り、胸が熱くなった。

9月2日（日）

午前9:00 練習⑥

立技（打込練習の仕方）

- A. 2人打込
- B. 3人打込
- C. 移動打込

五つ形復習

\*橋本・山口は最後の挨拶をして、10:00に空港へ移動

11:00 終了

12:00 橋本・山口グアム空港発 UA6便

16:30 // 成田空港着

18:00 佐藤・野口は柔道関係者主催のビーチ・バーベキュー会に出席

9月3日（月）

午前 5:00 佐藤・野口ホテルチェックアウト・空港へ移動

7:00 // グアム空港発

9:50 // 成田空港着

橋本先生と私は最後のあいさつをし、打込練習の様子を少し見学したのちリック先生、リック・ジュニア君と空港へ向かった。

私たちが道場を去った後、グアム側の希望で、予定になかった「五の形」の練習を行ったとのこと。理論を伴った技術指導が、いかに柔道修行者・愛好者の知的好奇心を刺激するかを物語っている。

佐藤君と野口君は練習終了後買い物に行き、最後の夜は柔道仲間が二人のためにビーチでバーベキュー会を持ってくれたとのこと（最終日まで買い物にも海にも行けない日程だった）。

総括・今後の検討課題など：

1. 五輪があったために、グアム側で事前の広報活動（マリアナ諸島）が十分できず、グアム島以外の参加はパラオのみとなった。それ以外については、事前準備、行事の遂行、メディアとの渉外など全てにおいて組織的な運営がなされていた。リック・ブラス先生の指示のもと、特にゲン・イマイ先生の細部にわたる準備、配慮がなければこのような行事は行えなかった。
2. 開催が夏休み最後の週末に重なったため、私たちの宿泊施設確保が難しかったが、オンワード・ビーチリゾート副総支配人の金光良昌氏の配慮で、快適な5日間を過ごすことができた（金光氏の子

息は柔道クラブのメンバー)。

3. ロンドン五輪においてリック・ブラス・ジュニア君が初勝利を挙げたが、五輪での勝利はグアム史上初の快挙として大きく報道されていた。島民の柔道に対する関心が高まる中で今回の行事が開催されたことは、グアムにおける柔道普及には最高のタイミングであった。既述の通り、通常よりはるかに多い40名が毎日の練習に参加し、早朝5:30からのトレーニングにも20名が参加した。
4. ジュニアクラス(小学生～高校生)の練習に取り組む姿勢が印象的だった。技術指導に素直に耳を傾け、短期間に多くのことを吸収していた。身体能力の高い生徒もいるので、練習を継続すれば競技成績も期待できるであろう。大会参加はジュニアクラスの生徒に身近な目標を持たせるとともに、練習成果を確認する貴重な機会であるが、グアム島における試合は全く無いとのことである。日本の試合に参加できるようにしたり、日本から生徒が来たときに小さな大会を開催するなど、今後の交流と協力が望まれる点である。
5. 「五の形」の演武と説明は大変好評だった。特に橋本先生が「海の民である皆さんのために」と「五の形」が海(波)の摂理を表現し、嘉納師範が投技の極意をそこに含めたという導入の説明が彼らの心を捉えた。さらに一貫して「柔道は競技選手だけのものではなく、子供からお年寄りまで、みんなのためにあるものです」と語りかけたことや、「道場だけでなく、自分の部屋でも仕事場でもビーチでも、どこでも学ぶことができる」という表現も、参加者に柔道に対する新しい視点を与えた。私が今まで経験した中で最も明るく活気にあふれた形の講習会であった(その後のグアムからの報告によると、「五の形」は継続的に練習しており、今後は子供達の昇級試験科目にするとのこと)。
6. 柔道を通じた「平和教育」の実践を目標に掲げたが、平和慰霊公苑をキャンプ参加者と訪れたことは大変貴重な時間であった。大人の方々は、勿論グアム戦のことをご存じだったが、「日本にも命がけで戦争に反対した人たちがいた」ということに感銘を受けた様子だった。また松前重義先生の人生と平和に対する思いにも大きく頷いていた。橋本先生が最後に「ですから東海大学柔道部の最終目標はチャンピオンを育てることではなく、柔道を通じて平和な世界を築くことです。東海大学の全ての学部は、それぞれの学問・研究分野を通じて国際平和を構築することを目指しています」と話すとき大きな拍手が送られた。
7. この5日間は、グアムの若い指導陣が指導方法を学ぶ機会になった。朝のトレーニングにおいては、限られた時間での効率的なメニューの組み方、具体的なトレーニング方法を指導した。道場における練習では、準備体操や補強運動の細かい動きにも意味があることを説明した。実技においては、特に立技・寝技とも、基本技術の習得方法(打込の仕方など)に時間を割いた。これらのことは学生指導員(佐藤君・野口君)が実際の動作で見せてくれた。二人の協力に感謝したい。今回の海外における指導は二人にとっても貴重な経験になったと思う。これをきっかけに視野を広げ、異文化に対する理解を深め、これから進む道で良きリーダーになってもらいたい。
8. リック先生からグアムを含むマリアナ諸島やオセアニア地域の島々の現状を聞き、今後の交流や協力が必要な分野について要望があった。グアムにおいては若い指導者の養成が急務とのこと、早急に具体的なプログラムを作成することで意見が一致した。それ以外の項目(指導者派遣、リサイクル柔道衣送付など)については、それぞれの島の状況と要望をリック先生が整理することになった。

グアムと東海大学の関係は松前重義先生の時代に始まり現在に至っている。特に私の恩師である、光本健次先生がリック先生との間に築いた信頼関係は大きく、今回の行事もその上に成り立った。私自身も光本先生のお陰で高輪台高校時代からグアムの方々と親交を築き、大学卒業後は1年間、この島で英語を学びながら柔道を指導する機会を得た。当時6歳だったジュニア君が島のスーパースターになり、数人で練習していた道場は40人を集め活気に満ちあふれるものになっていた。20年の歳月を感じるとともに、変わらぬ友情で夕食会に招いてくれたアリオラ家の皆さんはじめ、南国の優しさで私たちを受け入れてくれた方々に感謝したい。

グアムは観光業も順調で経済的には比較的安定している様子だったが、マリアナ諸島の島々は必ずしもこれと同じではない。今後も、日本から一番近いアメリカ・グアムとその周辺に広がるマリアナ地域と交流を活性化させ、柔道を通じた相互理解、人材育成を行うことは双方にとって大切だと感じた。

最後に、今回のキャンプに私たちを派遣して下さったNPO 法人柔道教育ソリダリティ理事長の山下泰裕先生、事務局の光本恵子さん、小澤浩子さん、企画から運営までご指導をいただいた橋本敏明先生、生徒たちと一緒に汗をかいて手伝ってくれた佐藤優作君と野口竜光君に心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

以上